

原発事故被災者

相双の会

NO. 7

発行日

2012年11月24日

連絡先

國分富夫（会長代行）

住所

〒965-0013

会津若松市堤町6-12

電話 090 (2364) 3613

メール

kokubunpi-su@hotmail.co.jp

進まぬ原発事故後の対策—急がれる人権を大切にした対策

國學院大學教授 菅井益郎

原発事故被災者相双の会が発足したのは今年の6月21日であるが、そのちょうどその1年前の6月12日、相双の会の前身の一つである南会津町避難者の会の国分さんから東電福島原発事故について講演を頼まれた。その際避難者が未来に希望を持てるような話しをお願いしたいとの要望があり、講演をお引き受けしたものの避難している人たちにどんなことを話さうのか頭を悩ませた。しかし東電福島原発事故は柏崎が故郷の私にとって「明日はわが身」かも知れないと思い、原発反対運動に取り組んだことから日本の公害の歴史を研究することになった体験を踏まえてお話することにした。

そこで事故から10日後の3月21日足尾銅山の鉍毒被害地から北海道のサロマベツ原野に移住した人びとが入植100周年を記念する催しを行なったことを引き合いに出しつつ、今後長く続く闘いに立ち向かう意義と覚悟について先ず話すことにした。避難している方々に対して僭越至極で、明るい希望とは言えないことを承知で100年前の鉍毒移住民のことを話した。先月の21日冷たい雨の中、佐呂間町栃木集落を初めて訪ね、栃木神社（二荒神社から分社）の秋祭りに参加し、また多聞寺（日光輪王寺の末寺）の住

職や移住民の3世代、4世代の方々から歴史と現状について話しを聞くことができた。

異郷の地に残った栃木団体直系の人びとは今や僅かになったが、後から四国や九州から入植してきた人びとが共に栃木地区を守り続け、さらには足尾鉍毒被害の歴史を語り継いでいることに私は大きな感動を覚えた。移住民の子孫でいっしょに佐呂間を訪ねた今泉洋子さん（1971年に3度目の帰郷運動の末に栃木に戻った）にとっては言葉に表せない感慨があったに違いない。

私は避難させられて1年8カ月、異郷で困難な生活を強いられている方たちの苦勞を思うとき足尾鉍毒被害民のことがいつも頭に浮かぶ。そのたびに与野党を問わず政治家たちの無能と無責任さに怒りが収まらない。当然開き直って原発の再稼働を叫び原発被災民の存在を無視し続ける原発推進派は決して許さない。たしかに原発や津波と震災の被災者のために親身に活動している議員も少数いるが、大部分は知らぬ顔だ。

今日ほど足尾銅山鉍毒事件で広範な鉍毒被害民を組織し、被害者救済のために生涯を捧げた田中正造の復活が待望されているときはないと思う。放射線量による地域分割や残存価値によ

る財産評価で補償金をランク付けするなどもつてのほかである。被災者の生活を環境も含めて丸ごと復旧させるのでなければ暮らしは取り戻せないのである。そんな簡単なことがこの国のエリートたちはなぜわからないのか！

かつての鉱毒避難民は移住先で筆舌につくせない苦勞を強いられたが、現在の日本は先進国で豊かな国である。避難している人たちは当然仮住まいから早く脱して普通の生活を営む権利がある。それは政治のあり方ひとつで可能になるのに、していない。政府が推進した原発の事故によって被災した国民を救済するのは政府の責

任であり、義務である。だが政争に明け暮れ真に被災民の将来を考えた対策をとらない、人びとの意向を聞こうともしない、まるで田中正造のいう「亡国」と同じ状況である。政府は原発避難民、震災と津波の被災民の人権を尊重して、皆が普通に暮せるようあらゆる対策を早急に行うべきではないか。

「公益々々と呼ぶも、人権を去って他に公益の湧き出るよしも無之と存じ候」

(1913年7月24日付書簡『田中正造全集』19巻271頁)

南相馬市立病院入院数51%

市災害対策本部会議の各分野の被害状況等の報告があります。

その中の「市立総合病院診療状況等」では、10月18日現在の在院（入院）患者数は、119人とされています。

市立総合病院のベット数（許可病床数）は230床ですから、51.7%の入院数になります。入院希望があっても平常時であれば入院をさせる患者でも、入院は50%前後に抑えざるを得ません。

入院させられないのは、医師、看護師などのスタッフ不足です。

医師、看護師は放射能を恐れて逃げたのだらうと思います。当然の行動だと理解できます。

特に子どものいる親は、いくら微量の放射能だから安全だと言われても安心とは言い切れないのは事実です。



線量の誤差に県民の怒り

福島県内の公共施設などに設置されている可搬型モニタリングポストの放射線量測定値が10%から低い値で公表していた。測定器によって放射線量には誤差があるが、鳴り物入りで導入された機器のゲータの信頼性が問われる。それだけでなく住民が測定したのと文部科学省の公表しているのは大きく違いがあると多くの方が話されています。

線量の測定は住民がやらないと信用できません。つまりは、線量の高い地域の場合、誤差の数値も大きくなる。認識が足りなかったでは済まされません。子供達の将来に関わる問題であり、命の問題でもあります。





「ふた冬目家に帰ると孫が泣く」

在 新潟市 檜葉町 渡辺光明さん

私の自宅は海岸より約5百メートルの高台にあり、福島第一原発から15キロ、第二原発から2キロの地点にあります。原発事故前の一昨年5月に一大決心をし、サラリーマンを辞め親から継いだ畑三町歩を活用し、家内と二人でスローライフ生活を目指し農業を始めたところでした。

三月ともなれば馬鈴薯、ごぼう等の準備に友達の手伝いを頂きながらトラクターで耕していた時でした。携帯電話がキュキュと鳴り出したと思ったら立ってられない程の大きな揺れ、地面の底からは無気味な地鳴りがゴーゴーと音をたて大きく揺れ動きました。自宅の屋根瓦はメチャメチャに崩れ落ち今にもペチャンコになりそうだ、地面も抜け落ちていくようなこれまでに経験したことのない地震だった。

翌日3月12日午後3時30分第一原発一号機が水素爆発した。私たちは原子炉そのものが爆発したと思い、もうこの地域は終わりだと思いました。その後も連続して爆発、無気味な白煙、放射能物質の拡散となった。

でも、すぐに帰れると思いき近くの檜葉町体育館に避難、そしていわき中央台南小学校、郡山のアパート、会津の旅館、新潟西スポーツセンター、新潟西区の借り上げアパート、6ヶ所の避難だった。

ボランティアの方々、新潟西区役所、社協の手厚いご支援を頂き涙のこぼれる思いでした。

昨年6月から新潟市の臨時職員となり、避難している約三百世帯の見守り相談員として毎日巡回訪問しています。

新潟県には約6千人の避難者がいますが、自

主避難の方々はその約半数います。郡山、福島の母子避難者が多く放射能による健康不安を抱えています。除染、除染と言うがどこまで効果があるのか、やり切れるのか不安なことばかりです。若い人達は新たな生活も始まっています。

まだまだ原発の収束見通しもつかない状況ですが、若い人達がそれぞれの考えで元気に健康な暮らしが出来ればそれでいいと思っています。

「原発でふる里に帰れずふた冬目」

「冬支度ガサゴソ捜す仮設かな」

「冬支度涙止まらぬふる里思う」

「落葉焚き煙くないのに涙する」

「避難民ため息凍るふた冬目」

もう逃げるところがない

Aさん

大変お世話になっています。

廃炉にすると、稼働時の7倍の放射性物質が環境に出るそうです。南相馬市で住む事を再度考えなおさなければならないと思います。

放射能の危険性をもっと市民が学ばないと、正しい意見が出てこないのではとも考えています。

南相馬市と同等レベルの0.3μSv/hで、26年経ったベラルーシでは、近年甲状腺の異常や白血病の患者が増えており、放射線被曝の累積で起こっているそうです。

子どもたちにこんな汚された土地を渡して良いのでしょうか。

いただいた「会報」には、農業をやめたい方が46%で、住民の移転を希望しない方が36.6%とあります。いろいろと難しい問題ですが、除染は万能ではありません。今回、南相馬市の除染がうまく行かず、逆に線量が上がっていると聞きます。私達にも協力要請が来ましたが、いつまでも無理なことにお金をばらまき続けると、補償すらまともに出来なくなります。

どうしたら良いのか、毎日悩んでいます。

補償の打ち切りが決まり、原町のパチンコ屋と飲み屋の景気が少しづつ傾き始めていると聞きました。果たしてここで経済が上昇するのでしょうか。

疑問です。一次産業を失い、ベラルーシで起きていることと同じことが起きれば無理だと考えます。

悩みます・・・頭が痛い・・・

涙をこらえながら読む

Bさん

「会報」いつもありがとうございます。私も小高区行政区長連合会で集約し、東電、原子力損害紛争審査会へ提出した「区民の精神的損害賠償額増額の訴え」を一読する機会がありましたが、貴会報への寄稿文と同様、一人ひとりの原発事故への怒り、悲しみ、苦しみの実態を涙をこらえながら読みました。それに対して先の見えないもどかしさ、言い表せません。

「会報」の充実を喜ぶ

Cさん

ご連絡、ありがとうございました。お住まいの会津地方は寒くなられたことでしょうか。

「相双の会」の広報誌を拝読させていただきました。発行を重ねるごとに充実され、とても嬉しく思っております。「アンケート」や「声」の欄を設けたことは、とてもタイムリーで読者の方々には、とても心強いメッセージになると存じます。

とても大変な仕事と思います。國分さんの意気を感じ入ります。

心から敬意を表したいと存じます。

また、お会いしましょう。

避難者をまとめて

Dさん

元気ですか。「会報」読みました。避難者をまとめて頑張ってください。

小出先生からまた激励が届きました

一昨夜のメール、「相双の会」会報6号頂きました。

避難生活中でのご活動、さぞかし大変なことと思います。

もちろん、福島原発事故は今現在も進行中で、そこで苦闘している作業員の方々も大変でしょう。

それに比して、本当に責任があるはずの東京電力、あるいは政府の人たちは相変わらず、高級住宅でぬくぬくと生きているのでしょうか。

その上、原発を再稼働、さらには新たに建設するというのですから、決して許したくないと思います。

これから冬に向かいますね。

すでに事故から一度冬は過ぎていますが、やはり大変でしょう。

ご自愛ください。

2012/10/30

京都大学助教 小出裕章